
印画紙の白に眠れ

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

印画紙の白に眠れ

【Nコード】

N7611M

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

別に怖くはない、ちょっと怪談ちっくなおハナシ。

このところ、毎夜、私の部屋に訪問者がある。

だいたい午前3時半頃だ。男が来る数分前に、決まって私は目を覚ました。男は幽霊である。ベランダの窓をするりと抜けて、私の寢床を大股に跨ぐと、そのまま奥の仏間の方に吸い込まれていくのだ。ダブルの背広を着た壮年の男だった。目を合わせたことはない。私は目を覚ましていたが、布団から起き上がることはなかったし、男の方でも私を見下ろすというようなことはなかった。ただ単純に、部屋に入ってきて、私の上を通り過ぎてゆく。それだけだ。不思議に恐怖感はなかった。

ある日、義母と電話で話した折、この男の話をすると、

「あンた、そりや昭之助サンだ。あの人、昔から夜中出歩く癖があつてネ、ホラ、のつぺりした馬面で、顎ンとこにでつかいイボがなかったかね」

などという。私は昭之助さんとは面識がなかった。それもそのはず、私がこの家に婿に来て四十年、かように霊前を守つてはいるものの、先立たれた妻のさらにその先祖など、並ぶ位牌の数でしか数えたことがなかったのだから。

電話は続いた。

「しかし、帰ってくるつてこた、あンた、そりや出かけてるつてことさね。いつ出てくのかね。昼間だと、見えないんかね」

つまらないことに気がつくものだ。

数日後、宅配便で古いアルバムが届いた。義母からだつた。赤いスエード地の表紙には、ちょっと不格好な金文字で『Your Memory』とあり、いかにも昭和の、町工場から商店街への販路が生きていた時代の、ちよつと垢抜けない香りがあつた。その1ページに付箋が夾まれていた。

開くと、それは屋外で撮つた古い記念写真で、黒松らしい幹の太

い木々の間に、和装の人々が三列をなして並んでいた。無論白黒である。結婚式のあとか、中央正面には、白無垢の女性と、紋付き袴の若い男性が座っていた。どの顔も知らない顔だった。写真の下には罫のあるノートの切れ端しが綴じられており、そこに参列者の名前らしい、巧みに崩したペン字のメモが書かれていた。

佐山菊五郎 とせ 山岡三次 秋乃 山賀金平多 はる……

一部は判読できない。だが、その中に、小瀬昭之助の名前を見つけた。

きつと、あの幽霊である。

しかし。

困ったことに、写真中のどの人物が小瀬昭之助か、全然わからないのだ。メモ書きの名前は二列で書かれており、参列者の並びとは一致していないし、また数的にも、明らかに参列者の総数よりも少なかった。

穴が開くほど写真を見つめても、答えが出るはずもなかった。白く褪色した小さな小さな参列者たちの顔が、揃って私を見つめ返すだけだ。

そこにあつたはずのカメラの代わりに、私を見つめる、目、目、目……。

私は義母に電話を掛けた。

「ああ、どうかね、それ、私の姉さんの結婚式、若い頃だから、昭之助さんも、死んだときとは顔つきも違うだろね。一度送り返してみるか？ でも、あたしが見てもわからんかも知れんねエ」

どうにも打つ手なしである。写真を机の上に出して、男が通るとき目につくようにしてみようかとも思ったが、それも失礼な話だ。男にとって私は、跨ぐべき布団の山に過ぎないのだ。

私はただ、いつものように待つことにした。そして、いつもよりはつきりと、男の顔を見てみようとした。

そして、寢床に入った。

気がつくと3時半だ。

男はいつものように窓を抜けて入ってきた。いつものように、古めかしい仕立ての背広姿だ。私は男が私を跨ぐ瞬間、彫りの深い顎に、義母の言ったイボを見つけようとした。

それは、なかった。

そう見て取った瞬間、私の意識に奇妙な揺らぎが起こった。同時に、男がぴたりと足を止めた。布団を越えてすぐの所である。私はぎくりとした。

男は私を見下ろしていた。まったく記憶にない顔だった。写真の中には混ざっていたのかもしれないが、見比べようにも、アルバムは机の上に閉じてある。

そのとき、唐突に、男が喋った。

「あんたね、俺は五十三で死んだんだよ」と。

それだけ言うと、男はまたするりと体を動かし、いつものように仏間へと消えていったのだ。男が消えた途端、庭の木の小鳥たちが、一斉に朝まだきの声を上げたように思った。

この晩以降、私の前にこの男が現れることはなくなった。

義母にこの話をしたが、じゃア誰だろうね、不思議だねというだけで、結局何の手がかりにもならなかった。その後も色々調べてみたが、男が参列者の中にいたのかすら、私にはよくわからなかった。その後私は、男の言った言葉を、ふと思い出すことがある。

私は今年で六十四になる。妻に先立たれて五年だ。あの男が誰だったか、いまだ知らない。もう知ることもないのだろう。あの男が五十三で死んだというのが本当だとして、いつ、どこで、五十三で死んだのか、皆目見当がつかない。

おそらく、だれも、もう誰も、あの男のことを、知らないのだ。

私も今年で、六十四になる……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611m/>

印画紙の白に眠れ

2010年10月28日03時18分発行